

Eureka VI

六年制通信 No. 22 平成 30 年 11 月 9 日 (金) 号

松阪の一夜

松阪の日野町に新上屋跡の碑があります。あそこですね、本居宣長が賀茂真淵と会ったのは。生涯たった一度だけの出会いです。真淵が伊勢神宮参拝の途中、松阪に立ち寄ったのですが、そのことを偶然耳にした宣長は真淵を探します。でも、そのときは見つけられず、夜になって真淵が新上屋に帰ってきたところを訪ねたらしい。宣長は当時 30 歳くらいかな、真淵は宣長の 30 歳は上ですから 60 歳を越えていたはずで。当時誰も読めなかった『古事記』を読みたいと言う宣長を、真淵は励まします。この二人の、たった一夜の出会いがなかったら、さて、宣長の『古事記伝』は完成していたかどうか、そう言われています。これは、昔は小学校の教科書に載っていた話なのですが、君たちは習いましたか。私は学校では習っていません。

宣長は真淵に会いたいと思っていた、しかし真淵は宣長のことは知らなかったと思います。ですが、一度の出会いで師弟となるほど、お互いがそれぞれの学問を認め合うのですね。素敵な話ではないですか。自分の憧れる人を見つけるだけでも幸せなのに。君たちもいずれ、自分の人生を左右する人と出会う（もう出会ったかな）ことでしょう。楽しみですね。

歴史の if は、考えても仕方ないのかもしれませんが、面白いのでつい想像してしまいます。大きな歴史、例えば「あの時、織田信長が討たれていなかったら」というのも楽しい想像ですが、個人の歴史の中にも無数の if が存在します。松阪の一夜のような出会いがなかったら、というような出来事は私たちのような市井の人々にもたくさんあるはずで。しかし、そういう if を考える度に、私たちは自分で自分の人生を選択して生きてきたのだということを、改めて思わざるを得ません。

昔よく言われたことですが、私たちには「選ばなかったもう一つの人生がある」、実は自分のすぐ近くにその人生は、今もある。そう言われているのですが、今まで耳にしたことはありませんか。こういう言葉に出会うと、私は何年か前に朝礼で言いましたが、フロストの詩を思い出します。

Two roads diverged in a wood... という、有名な詩です。この詩の結びは「森の中に二つに分かれた道があった。そして私は、あまり人が通っていない方の道を選んだ。そのためにどれほど大きな違いができたことか」です。二つの別れた道の、両方を歩むことはできません。私たちは常に、こういった岐路に立っています。今までに無数の選択をして、自分の人生を形作ってきたわけです。二択の道の一つだけを後悔なく選び続けることなど、おそらく不可能でしょうが、もっと不可能なのは、もう一度同

じ岐路に立ち、選びなおすことです。例えば、私がもう一度大学受験をすることはできませんよ。でも、そこに18歳の私はいません。そういう意味で、同じ岐路には立てないのです。ですから、自らが選んだ道を信じて、慈しんで歩むほかありません。

以上は、大人の話です。

君たちはこれから人生を歩んでいきます。もちろん既に、三重中高へ入学するという選択をしたわけです。もしそうでなかったら、君たちの人生は違ったものになるのかもしれない。しかし、君たちの目の前にはもっと大きな選択があります。大学生生活は、人生の方向を決める大切な時期です。それをどこのキャンパスで送るかは、慎重に選ばなければいけません。選べる立場に立たなくてははいけません。学力がつけば選択肢が広がります。だから受験勉強をします。実は、それで行きたい大学に行けたとしても、自分にとって最高の選択をしたかどうかはわかりません。しかし、おそらく、最高の選択は最高の努力なしには得られないものだと思います。精一杯の努力をしたかどうか、その一点に自信があれば自分の選択を信じていいと思います。

受験勉強は苦手だけれど、大学に入ったらちゃんと勉強すると、そう言う生徒がたまにいます。受験科目にない教科は、たとえ大学で必要だったとしても今は勉強する必要がないと考える人がそうです。でも私は「今まで」できなかった人は「明日から」もできないと思っています。これを打破するのは「今」しかありません。「今まで」と「明日から」の間にあるのは「今」だけなのですから、今始める以外に明日からの自分を作ることはできません。この6年間を懸命に努力すれば、きっと自分の夢を見つけられるでしょうし、師も立ち現われると信じます。頑張ってくださいね。

今週のおすすめ

・遠藤周作 『沈黙』 (新潮文庫)

長崎にまだコルベ神父の記念館がなかった頃、大浦天主堂の裏手に神父の紹介コーナーのような、小さな店舗がありました。そこに、踏絵のレプリカが展示されていたのですが、今でもあるのかなあ。遠藤さんは多くの人に踏まれて摩耗した踏絵からこの小説の着想を得たと言っています。長崎駅から車で30分以上かかりますが、海の方へ走ると、遠藤周作記念館があります。長崎のインターハイの時に、ソフトテニスの女子選手たちと訪れました。大雨で一日延期になったのでね。私がどうしても行きたいと監督さんをお願いしたのです。遊歩道には沈黙の碑が建てられています。「人間がこんなに哀しいのに 主よ 海があまりに碧いのです」と。私は今まで見た海で、息をのむような美しさを感じたのは、この記念館からの眺めだけです。遠藤さんもここからの眺めが好きだと書いていました。

カトリック作家としての遠藤さんの、生涯をかけた主題は既にこの小説に書かれています。また、ご自分の通っていた教会では、この本を禁書扱いされたのですが、それでも遠藤さんはこの作品を代表作だと言っています。映画化もされていますが、どれも原作には及びません。是非ご一読を。

BGMはハイフェッツ演奏の アヴェ・マリア でした…。